

一八六七年における浜松・佐倉藩士の上海視察

閻 立

一、はじめに

本論文は、一八六七年に浜松藩と佐倉藩によって上海へ派遣された使節団の活動内容を究明するものである。

江戸幕府からの上海派遣は三回にわたるものであった。一度目は一八六二年に貿易通商を目的として、五十一名の日本人が千歳丸に乗って上海へ出航した。二度目の一八六四年には航海訓練を主な目的として、傍らで海産物を上海で販売するために約五十人を乗せた健順丸が上海へ渡った。三度目は一八六五年に長州藩の武器密輸の調査を目的とし、幕府が三人を上海へ派遣した。毎回、使節団の代表者は上海道台府（上海地方官府）を公式に訪問し、上海道台と会談を行った。帰国後、復命書が提出された。

当時、清朝は条約国（一八五八年に天津条約を交わした国、英、仏、米、露。開港場での通商権と北京での公使駐在権を持つ）、無条約通商国（条約国以外のヨーロッパの国々、開

港場での通商権のみは与えられる）、朝貢国（朝鮮、琉球、ベトナムなど）に対し、それぞれ異なった外交政策が採られた。なかでも東洋から来た日本は右記のいずれにも位置付けられない立場にあり、日本をどのように位置づけるかという問題はずっと清朝官僚を悩ませたのである。

さて、千歳丸のとき、日本側の通商要求に対し、上海道台は上海のみなら通商させる提案をもちつつも、中央の総理衙門はそれを認めなかったのである。一八六四年の健順丸の場合、代理道台の応宝時^①が乾隆年間の則例を取り上げ、日清貿易関係がすでに存在していた事実を主張し、「日本番号」で海関手続きを済ませた。健順丸は通商の要求を提出しなかったもので、清朝政府は「一回限り」の上海貿易と認識し、異議を示さなかった。三回目の上海派遣は上海のオランダ領事やアメリカ領事からの事情聴取などが目的であったので、上海道台を表敬訪問しただけであった。日本の三回の上海来航に対し清朝政府は明確とした対応策を出さなかったが、他の欧

米列強国と異なる対応を模索していた態度を示したのである。⁽²⁾
 そして、一八六七年の場合は三度にわたる江戸幕府の派遣と異なり、浜松藩（藩主は井上河内守）と佐倉藩（藩主は堀田相模守）とが共同で使節団を編成していたため、いわば民間的な性格を持っていた。藩主からの派遣は前例がないわけではなく、一八五七年に土佐藩の藩主山内容堂が蝦夷との交易の可能性を探るために家臣を向かわせていた。しかし、旅券を持参した海外派遣は恐らく今回が初めてであった。幕府派遣の使節団は上海で用事を済ませてから直ちに帰国したのに対し、今回の派遣は上海のほかに南京、鎮江、蘇州まで足を延ばした。この関係で今回の滞在期間は最も長く、三カ月弱となった。（表一参照）

当時の清国では太平天国や捻軍が鎮圧され、社会秩序が戻りつつあった。李鴻章を中心とする洋務運動が盛り上り、一八六五年には上海で江南製作所が設置され、近代軍事工業が始まった。また、対外関係では多数のヨーロッパ小国と条約関係を結び、先述した条約国の数が増えてきた。このような背景のもとで、条約関係はいうまでもなく、通商関係すら締結していない日本から来た民間使節団はどのように活動をしていたのか、また、上海以外のところを見学できたのはどういう経緯があったのか。これらの問題を解明することによって一八六〇年代の日本の上海派遣及び清朝側の反応を全体的に捉えることができる。

一八六七年の上海派遣に関する先行研究はそれほど多くな

い。代表的なのは沖田一の『日本と上海』の「ガンジス号」の一部分と宮永孝の『高杉晋作の上海報告』の「第四次上海派遣」の一部分である。沖田の研究ではガンジス号の派遣や使節団員の構成、そして当時上海に滞在していた日本人の紹介など非常に詳しく、使節団の上海での活動や南京見学の部分に関し、主に使節団員の高橋由一の『上海日記』を軸にして、もう一人の安倍保太郎の『支那見聞録』を補助材料として、日期をたどって紹介した。宮永の研究は基本的に沖田の内容とほぼ同じである。

本稿では高橋と安倍の日記以外、使節団の責任者である名倉予何人の『三次壯遊録 卷之三』⁽⁵⁾、当時上海に滞在していた岸田吟香の『呉淞日記』⁽⁶⁾などを利用して、諸先行研究の中で触れていない部分を明らかにしたい。具体的には使節団と当時上海滞在の日本人との関係や中国人商人との貿易活動などを考察し、今回派遣の目的が通商にかかわる事実を究明したい。そして、南京見学の経緯を明らかにし、最後では、上海道台応宝時の対日観について触れたい。

二、派遣目的・渡航先および滞在記録

1、派遣目的・渡航先について

一八六六年に倒幕運動の強い圧力に押され、幕府は従来の特権的な貿易制度を廃止し、商用や留学に限って、条約締結国への海外渡航を認める「海外渡航差許布告」を発令した。開国以後も、漂流や密航などは別として、幕府の公用での海

外視察や留学以外の海外渡航は相変わらず禁制であったが、この布告によつてはじめて、一般の海外渡航が解禁されたのである。これで各藩は自力で海外との接触を行うことが可能となった。

一八六七年に浜松藩と佐倉藩とは共同で使節団を編成し上海へ派遣した。浜松・佐倉両藩がこの時期になぜあえて上海遣使の挙に出たのかは不明であるが、「使節一行の派遣には浜松藩主で時の老中井上河内守（正直）や譜代大名中開明派で聞こえていた堀田家の計画推進があつたものであろう」という推測がなされている。⁽⁷⁾

「海外渡航差許布告」が発令されたあと、日本外国事務局は海外渡航者に旅券を発行しはじめた。旅券には滞在期間、身分、氏名のほかに、年齢、身長、眼・鼻・口などの特徴も詳しく記述された。⁽⁸⁾さらに渡航の目的と渡航先への願いも書かれた。使節団員の高橋由一の旅券には

書面之者 学科修業として支那香港へ相越度旨願に因り此
證書を与へ候間 途中何れ之国ニ而も無故障通行せしめ
危急之節ハ相当之保護有之候様 其国官吏江頼入候

と記されている。⁽⁹⁾また同行の安倍保太郎の旅券には

書面之者 火術修業として支那香港へ相越度旨願に因り此
證書を与へ候間 途中何れ之国ニ而も無故障通行せしめ

危急之節ハ相当之保護有之候様 其国官吏江頼入候

と記されている。⁽¹⁰⁾

つまり表向きの渡航目的は学科や火術（鉄砲・大砲）の修業となり、渡航先は上海と明記しなかった。それでは、なぜ渡航先が上海へ変更されたのであろうか。

高橋由一の旅券の発行日は「慶応二年丙寅十二月四日」であつたが、「寅十二月廿八日書」と記した高橋由一の紹介状に次のことが書かれている。

高橋 怡之助

右ハ開成所出役ニ而画ハ巧ニ出来候者之処 此度上海江罷
越候ニ付 彼地ニ而御旅館江参上仕候ハ 御閑暇之節御遇
被下度奉願候 已上⁽¹¹⁾

上海滞在の日本人に高橋を紹介するこの紹介状は差出人・請取人とも不明であるが、日付から見れば旅券が発行されてから約二十日後に書かれたものであつた。渡航先は臨時に変更されたのか、あるいは、最初から目的地は上海と決まっていたにもかかわらず、旅券を取るために、名目上の渡航先として幕府の条約締結国イギリスに割譲された香港にしたのかはわからない。

使節団の責任者であつた名倉予何人は上海に来てから中国人と筆談したとき、次のように述べている。

今回我々九人が上海へ来たが、実は私はその案内役である。私らはわが政府に香港を遊歴し、中国とイギリスのことを学ぶことを申請した。政府は許可し、朱印の章を押してくれた。そこで今年の春の正月十一日に出帆し、上海に来航したわけである。⁽¹²⁾

結局、なぜ渡航先を香港から上海に変更したのかを説明しなかった。ただ、渡航先の決定に関して名倉は参与していたことがわかった。名倉は幕府の第一回上海遣使（一八六二年）一行に幕吏の従者として参加し、上海でたくさんの中国人と筆談していた。また一八六四年に横浜鎖港使節池田筑後守長発の随員として渡仏した。彼は渡仏の途次も上海に寄って旧友らを訪問し筆談を行った。上海は名倉にとって香港より馴染みがある場所であるため、渡航先を上海にしたかも知れない。幕府と同じ、渡航先を上海にしたことや紹介状を持参していたことから藩主らの初めの海外派遣に対する不安な心情がうかがえる。

なお、一行九人が乗船したのは横浜栄館第一〇一番（ジャーディン・マセソン商会の横浜支店）所有の蒸気船「ガンジズ」(Ganges)号（七四二トン、船長バーナード Bernard）である。船名について高橋由一の『上海日記』には「九時横浜ヲ発シカングス船ニ乗ル」となっているが、同行した安倍保太郎の記録によれば「横浜英館百壱番飛脚船 船名ガンケツ」と書いてある。沖田一は上海で発行された英字週刊紙

「ノース・チャイナ・ヘラルド (The North-China Herald)」の英語表記「Ganges」によって「ガンジス」であると訂正した。⁽¹³⁾

2、滞在記録について

九名の使節団員は次の面々であった。

浜松藩主井上河内守家来	名倉予何人	大林虎次
従者	伊東甚四郎	
浜松の町年寄	安倍保太郎	
田原藩士（元浜松藩士）	八木財次	
佐倉藩堀田相模守家来	串戸五左衛門	渡辺莊平
堀田摂津守家来	鍋木立本	高橋伯之助

使節団の責任者であった名倉予何人の名は信教（明治以後信敦）、字は先之、松窓と号し、また予何人と称した。一八五〇年に江戸に遊学し、昌平黉に学ぶかたわら箕作氏について蘭学を学び、翌年に藩校克明館の教授になった。維新後、開拓大主典、外務大録、外務大佑などを歴任した。一八七一年に清国と条約を締結するために、再度渡清し、李鴻章らと交渉した。晩年、漢学を教えて生活した。先述したように上海訪問はこれで三回目となる。上海滞在中に中国人と行った筆談記録は、現在『三次壮遊録 卷之三』として残っている。⁽¹⁴⁾ 安倍保太郎は浜松の町年寄で、帰国後保太と改名し、一八七〇年の冬、横浜に出ると、生糸や茶の取引に従事した。上

海滞在中のことは『支那見聞録』に収録されている。

高橋怡之助は幼名を猪之助、後に怡之介、維新後に由一と称した。一行中、のちに最も名を成し、明治前期を代表する洋画家となった。残されている『上海日記』は出帆した慶応三年一月十日（一八六七年二月十四日）から三月廿七日（五月一日）までの滞在日記であった。日記の内容は非常に簡略であったにも関わらず、日を追って滞在中のことを記されているため、使節団一行の活動を調べるには欠かさない資料であった。

三、上海での活動

先述したように、一八六二年来航した日本の千歳丸は清朝と条約関係にはないため、海産物などをオランダ商品として通関されてきたが、その後の貿易に関する件はすべて上海滞在のオランダ人に任せざるをえず、利益はほとんどオランダ側に取られた。また、清朝との貿易通商の打診も失敗に終わっていた。

一八六四年の健順丸の場合、搭乗者は全員日本人であり、当時上海道台代理の応宝時は乾隆年間の「江海関則例」に基づいて、東洋の商船が西洋より先に来航した記録があるという理由で、日本側商品を「日本番号」で通関させた。ここでは、応道台は意識的に日本と西洋国を区別する点に注目したい。今回日本側は通商について公式な交渉を行わなかった。

江戸幕府による二回の上海派遣は貿易および通商打診の効

果にそれほど大きな役割を果たさなかったが、上海道台から中央の総理衙門の大臣にいたるまでの対応はそれ以後の近代日清関係の展開に影響を与えたといえる。

一八六七年に来航した名倉一行に関しては、これまでの幕府使節団と異り、民間の個人の関係を利用して活動を行っていたのは特徴であった。

一八六七年の時点で上海滞在の日本人は極めて少なかったが、その中で岸田吟香と八戸弘光がよく知られている人物であった。

一八五九年十月にアメリカ長老派教会の宣教師ヘボン (James Curtis Hepburn) は、夫人とともに横浜へ来航した。

一八六六年七月にヘボンは横浜で『和英語林集成』を完成させたが、当時の日本はまだ活版印刷がなく、ヘボン夫婦は活版印刷ができる上海で印刷することにした。その『和英語林集成』に必要な日本仮名などの版下作成と校正のため、助手の岸田吟香が同行し同年九月に上海へ赴いた。当時上海で活版の印刷術を有する印刷屋は二軒があり、二軒とも宣教師によって設立されたものであった。ヘボンはそのうちの美華書館 (American Presbyterian Mission Press) に印刷を委託した。翌年五月には正式に出版され、最初の活版印刷による日英辞書となった。岸田は上海で画家や文化人や商人などと交流し、広い人脈を作ったのである。¹⁵⁾

八戸弘光は英語が堪能で、アメリカ系の商社であるオーガスティン・ハード (琮記洋行) の上海・香港店で勤務した

経験がある。西洋の生活・風習および社会制度などに関する知識が豊富であると同時に、漢学に関する素養も持ち合わせていた。幕末に上海に渡った日本人のための案内役も果たしている。⁽¹⁶⁾

上海にいる少人数の日本人グループは漢学の知識を豊富に活用し、上海で中国人と筆談したり情報を交換したりして中国商人や文化人と親密な関係を築き、広い人脈を持っていた。名倉一行は八戸と岸田の助けを得て、上海でいろいろな体験をできたのである。

使節団一行が慶応三年一月十五日（一八六七一年一月十九日）に上海に到着するやいなや、ハブニングが起きた。名倉一行のガンジス号の上海入港とほとんど同時にフランスの郵船アルフェ号も到着したのであった。この船には第十五代將軍徳川慶喜の弟で当時十四歳の徳川民部大輔昭武が乗っていた。將軍の名代としてパリ万国博覧会に出席し、そのあとかの地で留学生生活を送った昭武は総数三十名を率いて上陸した後、「英国の旅舎に上り、英佛其他の人々并本地の官人来りて安着を賀し」⁽¹⁷⁾という式典が行われ、イギリス、フランス、清国は十四歳の日本將軍の弟の来航に対し丁寧なる態度を示した。つまり、昭武一行が上海を出港する一月十七日まで上海には約四十名の日本人がいたわけである。

名倉一行は当初アスタ・ホテルに泊まる予定であったが、昭武一行も同ホテルに泊まることとなったので、名倉らは緊急に宿を変更せざるをえなくなった。その日のことを岸田吟

香は日記に次のように記録している。

七ツすぎに瑠記へいかふとおもふて、かしの方へ出て見るに、あすトルはうすのうちに、ひのまるの旗が立てゐるから、はてふしぎだな、日本の人がきたそうだ。（中略）それからかへりがけにミレバ、あすトルはうすのまへのかしに、人がおほぜいたつてゐるから、おしわけてそばへよつて見れば、日本人が八九人、小船からさんばしへあがる。ひよいと顔を見やわたしたのハかふらき立本、又あとからあがるのハ高橋怡之介、これハめづらしい、どういふわけで、ここへハおいでなさいましたといふに、いやいろ／＼のわけありさ、まあ、あとでゆくくりとはなしませうといふ。

（中略）

あすトルはうすの、ひのまるの旗を見て一人云、この旅館^{ホテル}にハ公儀の人がとまってゐるから、さしつかへるによつて、外の旅館へとまらねばなるまいといふから、さやうならバあなたがたハあすとはうすにとまってゐる人とハ別の組でございますかといへバ、さやうです、あれハふらんすの船⁽¹⁸⁾に乗て来た組で、私等ハいぎりすの船できましたといふ。

当日の午後四時頃に岸田は八戸がいる瑠記洋行へ向う途中アスタ・ホテル（あすトルはうす）のところに日の丸の旗が立っているのを見たので、日本人が来るとわかった。帰りに八、九名の日本人が小船から棧橋へ上がるのを見掛け、そし

て鍋木立本と高橋由一に挨拶をしたのであった。

そこでアスタ・ホテルに別の公儀の人が泊まるので、別の宿を探さなければならぬはめになった名倉らは、そのとき、八戸弘光と出会った。

はじめ、さくらのほつたさまのごけらい、かぶらき、高橋諸人、はままつのおのうへさまのごけらい某等九人、いざりすの船にて此處へきて、やどにさしつかへて、こまつてゐた処へきて、やどにさしつかへてこまつてゐた處へ弘光いきあはせて、いろ／＼せわをして、ぶらだアはうすといふ旅館^{ホテル}へとめてやる。それからあとの事などいろ／＼きのふも、けふも、せわをして今ハ理倉橋の王仁伯という支那人の處にゐるといふにて、はじめてわかる。大に安心する。近日にいてあひませう。¹⁹⁾

つまり、名倉らは困っていたときに八戸が来たので、ブラダラ・ホテル（ぶらだアはうす）を案内してそちらに泊まらせることとなった。それから一行は理倉橋にある王仁伯の私邸に移動し、帰国するまでずっと王仁伯の私邸に泊まった。名倉は一八六二年に上海に来た頃から王仁伯・王亘甫父子と知り合いになっており、そのため日記や筆談録によく王氏父子の名前が出ている。今回来航したとき、息子の王亘甫はすでに病死しており、名倉は彼の霊前に日本刀を捧げた。

偶然に名倉一行は上海に来たその日に岸田と八戸と出会い、

その後、二人の人脈を利用して、上海でさまざまな活動を行った。

高橋の一月二十日の日記に「夜ニ入岸田銀治^{ヤマ}来ル」と記している。²⁰⁾同日の岸田の日記にも同じことが書かれていた。

四ツじぶんから出て瑞興へいて、人參の直段の事や黄雲山の書畫の事など咄しをしてゐるうち弘光もこゝへ来る。めしをくふて弘光とともに理倉橋の王仁伯の處へいく。仁伯ハ上海一番のおいへがらにて、奉公せずにも五位の諸大夫ぐらゐの格式のよし。仕へれば三位以上になるといふ至ておほきな家なり。寺を見たやうなり。日本でたとへて見れば、とぎまだいミやうのやうなものだといふ。この家に此間きたかぶらき、たかはしの人々があるから、けふあひにきたのなり。しもふさのさくらのくしどさん、遠州のはままつの名倉さん、三州の八木さん、ミななかなか英雄なり。九人のひとミなおの／＼一見識ありと見えて、いろ／＼のおもしろいはなしをするなり。²¹⁾

その日の午前十時すぎに、岸田はまず漳泉会所の瑞興号へ行き、人參の値段や書畫のことを話した。そして八戸と一緒に王仁伯の私邸を訪問した。上海で有名な家柄を持つ王仁伯の豪邸で名倉一行と会い、楽しく雑談をした。名倉一行について、岸田は九人とも見識がある人物であると評価した。

そして二十七日の二人の日記にも、また同じことが記され

ている。

(岸田) こゝにてあきなひの事にて、いろ／＼わけあり。それについて、まだ名はしらねど、このあいだ日本よりきた人をあんないして、瑞興へつれゆき、学松と主翁とにひきあはせる。これ人参ならびに雑貨のあきなひの為なり。⁽²³⁾

(高橋) 午後人参掛り番頭学松 鮑魚掛り秋山 右ハ小東門前漳泉会所瑞興号ト云居所ニ在リ 日本長崎取引大商人也 此方江渡辺阿部伊東三人相越 外ニ商人来ル 依テ貨荷始テ開出ス 岸田銀治瑞興方江案内⁽²³⁾

岸田は名倉一行の貿易相手を紹介した。ここに出てきた(魏) 学松や(林) 秋山は人参や鮑や雑貨などの商売をやっている長崎貿易の商人であり、またほかの商人からも瑞興号に集まった。そこで渡辺、安部、伊東三人は日本から持ってきた商品を見せた。日本側の商品名と数量は不詳であるが、そこで商売の話を進めたと考えられる。

その後の高橋の日記には頻繁に「瑞興へ相越」や「学松来ル」という文字が出てきて、また連中たちは「升和綢緞舗」や「徳盛糖行」などの絹物や糖を扱う店へ出かけたり「長崎渡海之商人来」したりする内容も記録された。

岸田は日記に高橋のことを「人参、海參、鮑魚など、たい

さう上海へもつてきて賣ったといふ荷主様」と書いてあるため、一行が海産物を中心とする商品を上海で販売していたのは確実であった。ただ「たいさう」はどのぐらいの数量であるか判断しかねる。

上述したように一八六七年の上海来航の目的は表向きは学科などの修業となっていたが、資料を見た限りは通商貿易が主な目的であった。上海道台府や欧米国の領事館への正式訪問をしていないので、商品の販売は上海に滞在していた日本人の紹介を通して、中国商人との間で行われたことがわかる。貿易結果は未詳であるが、幕府の使節団と異なり、民間のルートで貿易のやり取りを模索した点からみれば貴重な体験をしたといえよう。

そして「学松今夕乗込 明朝横浜江出帆之由申聞ル」という文面からは、魏学松のような長崎貿易商人らが日本開国後に横浜で貿易を展開させる事実がうかがえる。つまり、上海、横浜、長崎の貿易ネットワークが形成されつつあり、この状況を見て、名倉一行が持っていた通商の考えが一層強くなったのであろう。

四、南京見学について

これまで、上海に来航した幕府の使節団は上海で貿易や調査を行い、任務が終わり次第ただちに帰国し、上海以外のところへは足を延ばしたことはなかった。一八六二年と一八六四年に来航した日本使節に対して上海道台と総領衙門は日本

側が上海以外の開港場にも舵を取ることを心配し、その都度「商品を取売したら直ちに帰国すること」「長江の沿岸に入ることとはできない」というように清朝の方針を強調して、伝えたのであった。

しかし、一八六七年の名倉一行は上海滞在中、南京見学を行うことができた。一八五八年の天津条約に南京が開港場と規定された。しかし、当時の南京は太平天国の首都となったため、開港が延期されることになった。一八六七年の時点では、南京はまだ正式に開港されていなかった。いったい、どんな経緯で南京見学ができたのであろうか。

これまでの先行研究は主に高橋由一の『上海日記』に基づいて日期をたどって行き先を中心にして論じたものであるが、南京見学実現の経緯についてはほとんど触れていない。以下、主に名倉と中国人との筆談録（『三次壯遊録 卷之三』）を利用し、南京見学実現の経緯を考察したいと思う。

西南戦争時における熊本籠城の守将として有名になった谷干城は、土佐藩の開成館の事業経営に関する調査で、慶応三年一月二十八日から二月三日にかけて上海滞在していた。彼の一月二十九日の日記には次のような内容を記している。

浜松人とか申し一人日本服にて来る者あり、是も彼の八戸に役せられたる体に見えたり。此人は八人連とか云ふ事なり、是は南京へ行く積りの由也。²⁷⁾

ここに出た浜松人は恐らく名倉のことであろう。先述したように名倉一行は慶応三年一月十五日に上海に上陸し、二十七日に岸田より紹介された長崎貿易商人らとの最初の会合が終わった。その後、南京見学の話が出たかも知れない。

現在、筆談の卷之一と卷之二は不明であるが、卷之三は慶応三年二月五日から十一日までの筆談であった。最初の二月五日に、下記のような金陵（南京）見学の筆談が行われたことから南京見学については恐らく以前の筆談録に記されていると推測できる。（以下、筆談は『三次壯遊録卷之三』により、高橋由一の日記は『上海日記』により、安倍保太郎の日記は『支那見聞録』によるもの。）

名倉 道台は我々に官船で金陵へ行くことを許可くださった。我々はどれだけ喜ぶかご存知であろう。我々は明日張公の邸宅へお礼を申すのはいかがであろう。あるいは出発日がわかってから行ったほうが良いか、教えてください。

仁伯 明日がいい。官船の手配や道台よりも委員の派遣などのことを前もって予定したほうがよい。そうであればそのときになって慌ただしくなる。

名倉 張公は公務で忙しいと思うが、何時ぐらいに行けばよいかご指示ください。

仁伯 午後ならいいだろう。

一八六七年に上海道台を務めていたのは応宝時であった。先述したように彼は一八六四年の健順丸が来航した際に道台代理として日本商品を「日本番号」として通関させたのである。

張公という人物はこの筆談録や高橋などの日記に頻繁に出る張秀芝のことであった。しかし、張秀芝のことについて、二月十日の筆談には「秀芝はその人の名で、籽雲という号を呼ぶべきである」という内容が出ただけである。高橋由一の日記に張秀芝が登場したのは一月廿一日であるが、「午後張秀芝来ル」という一文のみで、張秀芝はどういう人物であったかは紹介されていない。安部は「金陵に遊事を名倉海防分府の張秀芝を申官吏に段々相談相調」と書いていることから、張秀芝の役職は「海防分府」であることがわかる。またパリ万国博覧会に参加する途中、上海に立ち寄った洪沢栄一の日記には張秀芝のことを「道台支配后」と記されている。⁽²⁹⁾ 張秀芝に関する不明な点はまだ残っているが、応道台の部下であることがわかる。

高橋は二月三日の日記に「午後名倉氏八木氏同伴二而張氏江相越 金陵行会議相整」と書いていることから、つまり、一月の末に南京見学を計画し、二月三日頃名倉たちは張秀芝と相談し、その後、張秀芝は応道台に伝え、すぐに許可が下りたという経緯であった。

二月六日に名倉はお礼を申すために張秀芝の邸宅を訪問した。

名倉 きのはご連絡ありがとうございます。官船を出して我々に金

陵を案内するというご提案を道台に報告したら許可が下りたそうである。我々は大喜びである。私見によれば、貴国は隣国との関係を重視し、書生を同情し、交際を好み、窮乏を救う。これらの恩はどれほど大きいだろう。派遣する委員はすでに決まったかを伺いたい。また、官船の出帆はいつになるかを教えていただきたい。

秀芝 この件はすでに決まったので、ほごにしない。ただ、出帆する日はまだ決まっていないし、委員も定まっていない。決り次第、またお知らせする。お金はいらないので、収めてください。

名倉 お金はよそもので、無用のものにほかない。ご笑納くだされば幸いと思う。出発日と人員は決まったら教えてください。なお、決まっていなくても大体いつになるかと予想されているのかを密に教えてほしい。

秀芝 きのは道台から手紙をもらい、おおよそ十日前後だろう。決まったら前もってお知らせする。ご心配なく。

名倉 出帆前に教えてください。我々は首を長くしてご連絡をお待ちする。

名倉はまず丁寧に感謝の気持ちを表し、また随行者や出発

日などを尋ねた。張秀芝は名倉の不安を感じ、はつきり決ま
っていないものの行くことに心配する必要はないと名倉を慰
め、さらに今回の旅費は無料だと名倉に伝えた。

そして来る七日に、違う話題から筆談が始まった。

名倉 『管子纂話』は友人が書いた本なので、応道台がわ

ざわざ購入するというなら差し上げてもよい。(中
略) 友人に『管子纂話』に関する意見を聞かれたが、
道台の恩を受けているので、この本を道台に差し上
げると決意した。道台から一筆いただき友人に贈る
つもりだが、お願いできるだろうか。

つまり名倉の友人である漢学家安井息軒が自分の著作『管
子纂話』について、名倉に意見を求めている。名倉は応道台
の親切に返礼するために、友人の本を道台に差し上げること
にした。そのかわりに道台から友人の安井に一筆を下さいと
張秀芝に頼んだのである。それからいつもの内容に戻った。

名倉 我々は金陵の地理や風俗などがわからないので、往

復とも官船を使いたい。もし、官船が一日や二日で
戻るならその船で上海へ帰ってもいい。

名倉は南京のことをよくわからないという理由で、往復と
も官船を利用したいことを張秀芝に説明した。使節団の責任

者として安全策を考えていたのであろう。

八日も二人は引き続き南京見学について筆談をした。

名倉 昨日はわざわざ来ていただき、いろいろ教えてくだ

さつて我々に対して何とご親切であらう。十日に官
船に乗る。委員は張という方で、武官でありながら
文道も兼ねているそうだ。いろいろ教えてくださっ
て幸甚である。大国から遠くにいる人々を懐柔し窮
乏している人々を救うという様々な恩を受けた。閣
下は我々を同情し道台に頼んでくださった。我々は
ご恩を蒙って感謝に堪えない。十日は何時に乗船す
ればいいのか、また官船はどこで出帆するのかを教
えてください。

秀芝 十日に出帆するかどうかがまだ決まっていない。十五

日までには必ず出帆する。この間手紙が王仁伯に送
られたが、金陵へ全部で何名がいくのか、参加者の
氏名を記入してください。それで公文の書類を準備
し送付する。

名倉

出帆する日は未定であるが、十五日までに必ず出帆
できることを承知した。ありがとう。きのう閣下か
ら委員は張氏と聞いたが、その人はどこに住んでい
るのか、出発前に張邸に行ったほうがいいのかを教
えてください。

秀芝 船は「鉄皮」といい、張氏はその船の責任者である。

わざわざ訪問しなくてもいい。乗船したら会える。

名倉 いつ乗船するのか後日教えてください。

秀芝 必ずその通りにする。

名倉 応道台は友人の拙著に序文を書いてくださるそうで、友人のかわりに感謝している。

名倉は出発日や随行者などのことを早く知りたいようで、張秀芝にいろいろ尋ねた。一方、張秀芝は十五日までに必ず出帆すること以外、何も言えなかった。また、公文を準備するために搭乗者の名簿を出してほしいという内容からは、この名簿をどこかへ提出する可能性が高いと考えられよう。

また、前日の筆談で応道台に頼んだ安井息軒への一筆の件について、道台は『管子纂話』の序文を書くことにしたのである。³⁰⁾

翌日の九日に名倉と張秀芝はまたいつもように南京見学について筆談を引き続き行った。

名倉 今回我々九人が上海へ来たが、実は私は案内役である。私はわが政府に香港を遊歴し、中国とイギリスのことを学ぶことを申請した。政府は許可し、朱印の章を押してくれた。そこで今年の春の正月十一日に出帆し、上海に来航したわけである。閣下は我々に対して誠に真心であり、我々は親切にされすぎる

と思っている。中国に対する平素の声望はさらに高まっている。金陵観光の願いに応じてくださって、我々の喜びをご存じであろう。弊国と貴国は以前から一脈相通じ、赤毛に青い瞳の者と異なるに違いない。堂々大清国は我々九人を助けて我々は旅費を出されずに金陵への観光ができる。誠に隣国に親しみ、遠くにいる人々を懐柔し、書生を大事にし、窮乏している人々を同情する厚情である。閣下は我々の申請を許可し弊国の政府はそれを聞いたら喜ぶであろう。大国の恩義を感謝するであろう。そして通商の意は日増しに強まる。貴国と弊国の交際も日増しに深まっていく。これは日も夜もなく祈っていることである。(中略)。

秀芝 金陵の観光は道台に強く願っていたので、許可をしてくれたのである。船賃は結構だ。その船で往復するささやかな費用なら道台は惜しくないであろう。

「弊国と貴国は以前から一脈相通じ、赤毛に青い瞳の者と異なるに違いない」という名倉の考えから彼の日清提携の考えが見られる。³¹⁾ 通商や両国の関係についての筆談はこれが初めてであった。名倉は欧米と異なり日清両国は以前から共通の部分があることを強調した。「上海の情勢を探らせ、あわせて将来における日清の緊密な貿易関係樹立の可能性を打診する意図もあったと考えられる」と指摘されたように、³²⁾ 名倉

はこれから両国が通商し関係がますます深まっていくと期待していた。これに対して、張秀芝は触れないままで、その日の筆談は終了になった。

十日に張秀芝から手紙が二通来た。乗船は十二日に決定したとの連絡であった。

十一日に出発前の事前準備などについて筆談を行った。

名倉

昨日お手紙を二回送っていただき拝読した。応道台は我々を同情し願い事を許可した。我々は旅費を出さずに観光の願いがかなうことができるので、心より感謝している。座ったまま夜明けを待ち、急いでご邸宅に来て、謝恩するつもりである。明日何時に乗船するか、また官船はどこにあるのかを教えてください。また道台と張公の恩を感謝するために文章を書いた。

秀芝

拝領する。ありがとうございます。道台は委員を宿泊先へ行かせ、出発日を面談することになった。きのう行かなかったら今日必ず行くので、待ってください。ただし、船は行き来のための公務船なので、食事は美味しくない。皆さんはどうか大目に見てください。船は金陵で約三、四日間泊まる。今回は大体見て後日また見物しよう。必ずその船で上海へ戻ってきてください。道台に承諾させたので、私の信用を失くさせないでほしい。幸甚である。

名倉

委員は弊寓へ来て出発日を面談することを感謝する。船上の食事について大国の恩恵を受けて深く感謝している。また、船は金陵で三、四日間泊まり、後日ゆっくり見物するなどのご指示に従う。決してご命令に逆らうことはしない。明日、何時に官船に乗ればいいのかを教えてください。

秀芝

私はなぜ知らないかという、道台は委員に接待のことを手配させているから、何も聞いていないのである。きのうの二通の手紙を調べてください。

名倉

我々が出てから委員が弊寓に来たら、残っている人たちは慌てて困るかも知れない。ただちに帰って委員のご訪問を待たぼうがいいだろうか。敢えて尋ねるが官船はどこに泊まっているか、帰りは官船の泊まる場所を通るなら先に委員を訪問し出発日を尋ねるのはいかがであろう。

秀芝

中国の船は全部武官に管轄され、捕盗局に属する。私はその局と全く関係がないので、聞いていない。きのう道台は委員を派遣し伺わせると言っただけである。きのうの二通の手紙に船のことを書かなかったのは、省略したのではなく知らないものである。

(後略)

二月十二日に出帆と決まった。張秀芝は名倉に対していくつかのことを注文した。まず、船中の食事はまずいので、み

なさんに我慢してほしい。そして、南京では三、四日しか停泊しないため、ゆっくり見学できないが、自分の信用にかかわるので、全員が同じ船で上海へ戻ることを願った。また、官船は武官に管轄され、捕盗局に属しているので、船の停泊の場所や随行者などについての質問には答えられないことを名倉に理解してほしいということであった。

筆談卷之三の南京見学の話はこの日で最後となった。それ以後の見学の内容は高橋や安部の日記に基づくものになる。高橋は出発日について次のように記している。

二月十二日

美晴

八時過出帆 金陵江趣 官船船号奉旨江南緝捕勇船 旗号ヲ建ル 案内官人徐伝隆同行 八戸順叔同行 上海ヨリ呉湘 松江ヲ登リ 夜二入碇泊

安部は同日のことを次のように書いてある。

金陵に遊事を名倉海防分府の張秀芝を申官吏に段々相談相調 二月十一日八点鐘に火輪船乗て可参との沙汰あり 此時に案内の役人武官にして徐伝隆と申三十二歳の才子になり是三品の官位なり 此人が船中並金陵滞留中の賄方也 同船に金左大臣一品と申役人も同船なり

今回南京見物の随行者は三十二歳の武官徐伝隆であった。徐伝隆という人物は、後に清仏戦争と日清戦争で有名となる将領である。また、八戸は同行したが、岸田は来なかったようである。そして、同船に金左という一品大臣もいたことがわかった。

その以後の旅程は下記のようなようであった。

出発後、鎮江、瓜州、竜潭鎮、五竜山、燕子磯などの名所を経て、十四日十三時に金陵湊に着帆した。そして一行は、小舟に乗り換えて秦淮河を遡り始め、一時間後金陵に上陸した。その後、十五日と十六日に南京で夫子廟、雨花台を見学した。十七日十時に小雨のなかで再び小船に乗り秦淮河を下り始めて、のち長江に停泊中の官船に搭乗した。高橋の日記に「雨中尤興多シ 兩岸ノ緑草 実ニ春色鬱ヲ散ス」と記し、江南の春を満喫していた。その後、蘇州を通って十九日に上海へ帰ってきた。

日本人一行の南京見学についての清国側の記録はまだ見つかっていない。応道台は公式の活動として報告しなかったかも知れない。一方、日本側は三月の『万国新聞報』に日本人の南京見学のことを報道した。

二月中支那に在る日本諸藩七十人と共に南京金陵に赴きたりしに、支那政府より士官に命じ、名場旧跡周く嚮導せしめたり、其の中畫に工なる者あり、其光景を悉く描写せり、八戸書を能す、支那にて求むるもの甚多し。また英語に通

す、対話殆英人の如し。⁽³³⁾

「一行七十人」は恐らく誤記で「晝に工なる者」とは高橋を指すと考えられる。一行が南京を訪問した時に携えて帰った雨花台の石と、孔子廟の瓦の破片とを写生した一幅の掛物が残っている。⁽³⁴⁾そして、岸田の名前は新聞にも日記にも出なかったで、彼はやはり参加していなかったと思われる。

以上の筆談内容の分析によって名倉一行の南京見学の経緯がわかった。要約すると、張秀芝は名倉一行の南京見学の願いを上司の応道台に報告した。これを受け、応道台は官船を出して随行者を同行させ、無料で一行を南京へ行かせることにしたのである。残っている日記から見ると、名倉一行は道台府を訪問したことはなかったし、応道台と面識もなかった。単に張秀芝の紹介という個人的関係ゆえに日本人一行を南京へ行かせたのであろう。南京見学はむしろ民間派遣であつたからこそ可能となった。

先述したように一八六四年に健順丸が来航した際、上海道台代理であつた応宝時は日本商品を「日本番号」で海関させたのである。今回の使節団に対し、頼まれた漢学者の著書の序文を書き、面識もない一行に費用を提供し、南京とその周辺へ行かせた。このような待遇には当時、清朝と条約関係を結んでいない日本に対して、他の欧米諸国と異なって、日清のみの関係を築きたい応宝時の姿勢が見られる。この点では、名倉の考えと一致しているのである。

五、終わりに

一八六七年の上海派遣の意義について「既に述べた通り一行の目的の一部は火術修業であつたが、少なくとも安部と高橋の筆記に関する限りに於いては、其の方面のことは少しも見られない。思うに火術修業とは表面上の理由で、一行の目的は当初より一般海外視察であつたのであろう。支那を知り、支那文化人を知り、彼等と交遊し、日本を紹介し、邦人の視界を広めた点に一行の意義を認めることができる」と指摘されている。⁽³⁵⁾

本論文では使節団一行の小規模な民間貿易活動という側面を考察し、横浜、長崎、上海という新たな経済秩序の形成に注目し、通商の側面から今回の派遣を位置づけた。

しかし、「使節は上海から蘇州、鎮江、南京等を視察して帰つたが、帰つたときは復命も何もない。朝・幕の関係は極度に緊張していた」と言われたように、⁽³⁶⁾名倉一行の派遣はどれほど藩にとって役に立ったのか不明のままであつた。

また、上海道台応宝時の対日観にも触れた。彼の一八六四年と一八六七年の行動から見れば、日本との間で新たな関係を模索していたと考えられる。

そして、名倉一行が帰国して半年余り、「慶応三年丁卯十二月二十八日」の日付となつていた長崎奉行の河津伊豆守からの書簡が応宝時の手に届いた。

日本人がヨーロッパへ行く際は官署から旅券が発行され、

旅客調査のため事前に旅券の印章を西洋諸国へ発送する。この手続きによって、日本人は至る所を安全に通行できるようになっていた。現在、貴地へ赴き、学術を伝習したり商業を営業したり、便宜をもって居留したりするという要請が出ていたので、今後、このような人物が貴地へ行った際には、面倒を見てほしい。しかし勝手に入ること恐れるため、旅券取調の印章を上海道台署へ呈示する、という要請であった。⁽³⁷⁾

応宝時はこれが日本側の通商を求める意向だと理解し、「もし通商の要請が強く拒否された場合、日本人は必ず西洋諸国の力を借りて清国と条約を締結することになる。スペインやイタリアやデンマークと同じようにする」はずだと心配し、そこで彼の出した提案は、「ここでは日本商人との貿易を認めておき、別途、制限する（箝制）章程を議定したほうがよい。これだと朝廷の寛大な意を示しながらも、条約国を増やさなくて済む」とのことであった。⁽³⁸⁾

応宝時は日本側の要請を拒否することで条約締結を迫られる可能性を予想した。そこで、彼は清国側が主導権を握って日本を「制限」できる章程を結び、日本を西洋に頼らせない点を考慮した。

また、一八七〇年代頃から李鴻章の命令を受けて応宝時は日清間の条約締結の準備に参加し、条文作成から日本側代表との交渉にいたるまで、日清両国間で欧米列強国とは異なる条約を作る姿勢を最後まで貫いたのである。一八六〇～七〇年代までの応宝時の対日観を今後の研究課題として、その全

体像を究明したいと思う。

表一 一八六〇年代に上海に派遣された使節団一覧表

回数・船名	上海滞在期間（西暦）	使節団の構成	派遣目的	特徴	上海道台	上海道台府訪問
第一回 （千歳丸）	一八六二年 六月三日～七月三十一日	御勘定根立助七郎以下日本人五十一名、イギリス人十五名、オランダ人一名	①海外貿易の試行 ②上海通商の打診	オランダ商品としての通関	呉煦	有
第二回 （健順丸）	一八六四年 三月二十八日～五月十四日	函館奉行支配調役並山口錫次郎以下五十余人	①航海訓練 ②海産物の販売	「日本番号」での通関	応宝時 （代理）	有
第三回 （北京号）	一八六五年 四月二十日～四月三十日	外国奉行支配調役石井岩司以下二名	①長州藩の藩船売却の調査 ②通商条約締結の予備調査	第二次長州戦争の導火線	丁日昌	有
第四回 （ガンジス号）	一八六七年 二月十九日～五月五日 （三月十七日～二十三日南京滞在）	浜松藩井内河内守家来名倉予何人以下八名	学科・火術の修業 （一般視察・貿易通商）	①浜松・佐倉藩主に よる派遣 ②南京見学	応宝時	無

註

（１） 応宝時（一八二一年～一八九〇年）は字を敏斎といい、浙江省の出身であり、一八四四年に科挙の試験に合格し挙人となった。曾国藩と李鴻章と一緒に太平天国を鎮圧したあと、一八六四年に代理上海道台になり、一八六五年～一八六九年に上海道台を務めていた。在任中、龍門書院を創立し、人材育成に力を入れた。一八七〇年に江蘇按察使兼布政使になり、管轄していた地域の農業や水利事業を發展

させた。同年、李鴻章に推薦され、日本と条約締結の準備に手を加え、条文の作成および日本側との交渉に参加した。

（２） 閻立『清末中国の対日政策と日本語認識——朝貢と条約のはざま』東方書店、二〇〇九年、第二章を参照。

（３） 沖田一『日本と上海』大陸新報社、一九四三年。

（４） 宮永孝『高杉晋作の上海報告』新人物来社、一九九五年。

高橋由一『上海日記』青木茂編『明治洋画史料 記録編』中央公論美術出版、一九八六年。原本書は東京芸術大学図

書館に収蔵されている。

安倍保太『支那見聞録』原文書は遠州笠井町の森田氏が所蔵されていた。京都大学古文書室にはこの写本がある。

- (5) 名倉予何人『三次壮遊録 卷之三』原筆録は浜松の内田旭氏が所有していたが、現在不明になったようだ。京都大学古文書室には写本がある。この筆談録はガンジス号で上海へ行ったとき、数人の中国人と筆談した記録である。名倉は一八六二年の千歳丸一行の一員であり、また一八六四年、横浜鎮港使節池田筑後守長発の随員として渡仏した。彼は渡仏の途次も上海に寄港しているので、今回は三回目である。それで『三次壮遊録』と名付けたと考えられる。しかし「卷之一、卷之二」が行方不明である。

- (6) 岸田吟香『呉淞日記』は慶応二年十二月から慶応三年四月までの部分が現存する。原文書の一部は子孫の家に保存され、近年岸田吟香の故郷岡山県の岸田吟香記念館に寄贈された。円地与四松による翻字は一九三一年から一九三二年にかけて『社会と国家』（一匡社）一八五、一八八、一九〇、一九二、一九四号、一九七、二〇〇の各号に掲載された。

- (7) 宮永孝『高杉晋作の上海報告』新人物往来社、一九九五年、二〇九頁

- (8) 例えば使節団員の高橋由一の旅券には身長などについて次のように記している。

身丈 五尺三寸
眼 常体
鼻 常体
口 大キ方
面 長キ方

黒痣 右眼尾一 右瞼一 鼻右側一 左鬢一

- (9) 外交史料館所蔵「海外行人名表（旧政府ノ節免状申受者姓名調）」「慶応二丙寅年中 海外行人名表」
- (10) 外交史料館所蔵「海外行人名表（旧政府ノ節免状申受者姓名調）」「慶応二丙寅年中 海外行人名表」
- (11) 青木茂編『明治洋画史料 記録編』中央公論美術出版、一九八六年、十二頁
- (12) 名倉予何人『三次壮遊録 卷之三』
- (13) 沖田一『日本と上海』大陸新報社、一九四三年、一八八頁
- (14) 白柳秀湖「松窓名倉予何人伝（上）・（下）」『書物展望』一九三四年十一月号、十二月号を参照。
- (15) 岸田吟香に関して、沖田一『日本と上海』大陸新報社、一九四三年、一九一頁、一九四頁を参照。また、杉山栄『先駆者岸田吟香』大空社、一九九三年を参照。
- (16) 八戸弘光に関して、沖田一『日本と上海』大陸新報社、一九四三年、一九四頁、二〇二頁を参照。また最近の研究として陳捷「幕末における日中民間交流の一例——知られざる日本人八戸弘光について」『中国哲学研究』第二十四号、二〇〇九年が詳しい。
- (17) 渋谷栄一「航西日記」日本史籍協会編『澁澤栄一滯佛日記』東京大学出版会、一九二八年、七頁
- (18) 岸田吟香『呉淞日記 第三之冊（中）』（十五日条）『社会と国家』第一九三号、一匡社、一九三二年
- (19) 岸田吟香『呉淞日記 第三之冊（中）』（十七日条）『社会と国家』第一九三号、一匡社、一九三二年
- (20) 高橋由一『上海日記』（一月廿日条）青木茂編『明治洋画史料 記録編』中央公論美術出版、一九八六年

- (21) 岸田吟香『吳淞日記 第三之冊(中)』(二十日条)『社会と国家』第一九三号、一匡社、一九三三年
- (22) 岸田吟香『吳淞日記 第三之冊(下)』(一月二十七日条)『社会と国家』第一九四号、一匡社、一九三三年
- (23) 高橋由一『上海日記』(一月廿七日条)青木茂編『明治洋画史料 記録編』中央公論美術出版、一九八六年
- (24) 岸田吟香『吳淞日記 第六之冊』(四月一日条)『社会と国家』第二百号、一匡社、一九三三年
- (25) 高橋由一『上海日記』(二月七日条)青木茂編『明治洋画史料 記録編』中央公論美術出版、一九八六年
- (26) 古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、二〇〇〇年を参照
- (27) 对支功労者伝記編纂会編『続对支回顧録 下巻』大日本教化図書株式会社、一九四一年、十八頁
- (28) 安部保太『支那見聞録』
- (29) 洪沢栄一『御巡国日録』日本史籍協会編『澁澤栄一滯佛日記』東京大学出版会、一九二八年、三七二頁
- (30) 応宝時は一八六七年の春に書いた「管子纂詁序」の中で「介其国昌平孺員中邨君、以書示、余受而讀之。」(日本昌平黉の儒者である中村君を介して、安井の本を見せてくれた。私はこの本を受けて読んだ)と書いている。応宝時は名倉の名前を誤記したと考えられる。富山房編輯部編『漢文大系 第二十一巻 管子纂詁 晏子春秋』富山房、一九七七年
- (31) 名倉の日清提携論については、森田吉彦「兵学者名倉信敦の幕末海外見聞」『帝京大学文学部紀要日本文化学』第四十号二〇〇九年三月を参照。
- (32) 宮永孝『高杉晋作の上海報告』新人物往来社、一九九五
- 年、二二四頁
- (33) 慶応三年に発行された『万国新聞報』第三集、慶応三年三月下浣
- (34) 白柳秀湖「松窓名倉予何人伝(下)」『書物展望』一九三四年十二月号
- (35) 沖田一『日本と上海』大陸新報社、一九四三年、二二三頁
- (36) 白柳秀湖『定版明治大正国民史 維新改革編』千倉書房、一九四〇年、二六六頁
- (37) 同治七年三月初三日収、上海通商大臣文一件(台湾中央研究院近代史研究所蔵、総理各国事務衙門清檔・「無約国案(日本)・日本請求通商貿易事」〇一—二一、二二—三)(以下省略)
- (38) 同治七年三月初三日収、上海通商大臣文一件
- (附記) 本稿を執筆するにあたり家近良樹先生から貴重なコメントを頂戴しました。ここに記して感謝申し上げます。